3　研究II　児童自立支援施設外チームサポート

3.1　サポートチームによる社会的自立支援の概要

3.1.1　研究目的

研究IIでは、小学校時代から問題行動を繰り返してきた中学生の社会的自立支援を、児童自立支援施設スタッフがコーディネーターとなって家庭・学校・関係機関のサポートチームによって行うことにある。

(1) 重大な問題行動を伴う生徒に対して、アセスメントに基づく生徒理解を行い、個別の援助計画を策定し、家庭・学校・関係機関が連携・協力しサポートチームを形成し、個別の発達援助を行う。

(2) サポートチームによって、問題行動生徒の自己変容と社会的自立が促進されることを明らかにする。

3.1.2　研究対象及び方法

研究対象及び方法は、以下の通りである。

(1) 研究対象

対象となる生徒は、B県の公立大規模中学校3年生である。小学校の高学年より問題行動を繰り返し、警察への補導歴がある生徒指導上重大な問題を抱えた生徒である。中学3年になり遊び型不登校状態が顕著になった。また、学校外の非合法集団との関係が深まった。

(2) 研究方法

1) 対象生徒に対してアセスメントを実施し、問題解決にとってふさわしいサポートチームを形成し問題解決を図る。サポートチームは、**Fig.25**のような〔アセスメント $\Longrightarrow$ 個別援助計画の作成 $\Longrightarrow$ サポートチーム実践 $\Longrightarrow$ サポートチーム終結〕というシステマティックに展開される。

2) 対象生徒・家庭とサポートチームの連携調整役として、児童自立施設のスタッフが介入する。本研究では、このスタッフを、自立支援コーディネーター[9]と呼びことにする。

3) サポートチームの実践モデルは、**Fig.26**のように自立支援コーディネーター・家庭（保護者）・サポートチーム（関係機関）が連携ネットワークを形成し、対象生徒の問題を改善・解決し、最終的には進路達成を図ろうとするものである。サポートチームは、中学校・教育委員会・青少年健全育成協議会・

[9] 兵庫教育大学大学院生徒指導講座・児童自立支援施設スタッフの原田耕一郎氏が担当した。

社会福祉協議会・児童相談所・民生委員・少年相談員・警察・自治会長・近隣住民から構成されている。

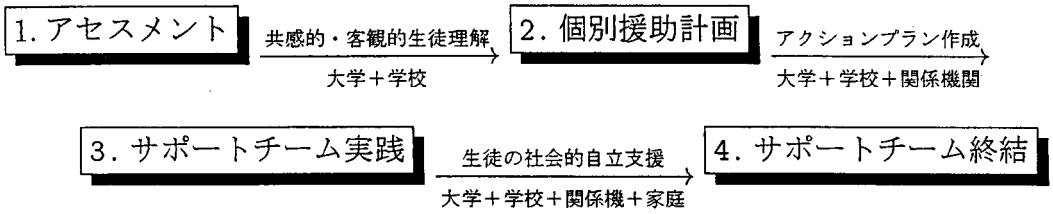


Fig. 25 サポートチームの展開過程

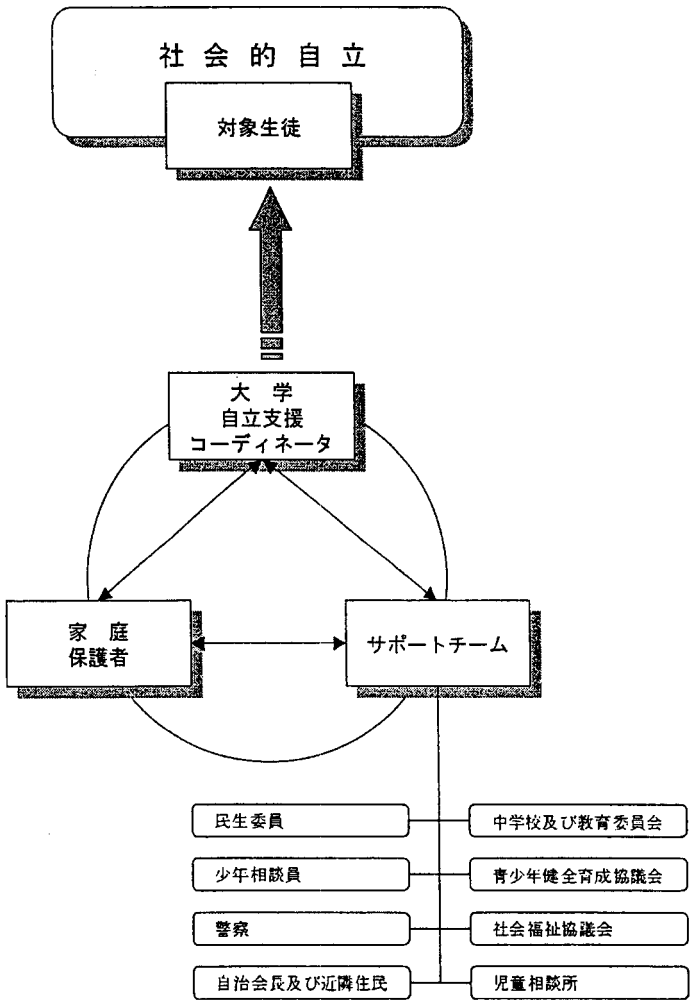


Fig. 26 サポートチームの実践モデル

3.2 研究結果

3.2.1 サポートチームの展開過程

サポートチームは、2004年12月から開始され、翌年2005年3月末に終結している。具体的な展開過程は、Table8～Table10の通りである。

Table 8 サポートチーム展開過程

時　期	回	事　項	具体的な内容
12月上旬	1	サポートチームの承認要請	中学校長へ大学連携によるサポートチーム研究の趣旨と内容、方法についてを説明する。学校長より、第3学年の男子生徒で行うことを提案される。対象生徒の家庭環境等を考慮すると、地域支援が必要であると判断された。そこで、学校長とも話し合い、健全育成協議会会長にもその旨の連絡及び了承を得る。
12月中旬	2	中学校教職員に対するサポートチームの説明及び共通理解	対象生徒を抱える中学校教職員に対して、サポートチーム研究の趣旨・目的・内容・方法について説明を行い、共通理解を図った。
12月下旬	3	対象生徒保護者に対するインフォームドコンセント	対象生徒の保護者に対して、学校・大学・関係機関が連携した社会的自立に向けた援助を行うことを説明し、研究への協力を得た。
	4	第1回サポートチーム会議の開催	本研究の趣旨と内容・方法についての説明し、問題と課題について検討した。サポートチームの編成及び個別援助シートの記入方法の説明・守秘義務と情報公開請求への対応の確認を行う。(参加者 ⟹ 青少年健全育成協議会長・中学校PTA会長・小学校PTA会長・自治連合会長・ 地区社協会長・少年相談員・青少年補導委員・地区民生委員・主任児童委員・交番署長・中学校校長・中学校PTA副会長・中学校生徒指導主任・中学校担任・中学校学年主任・中学校スクールカウンセラー・小学校生徒指導主任・小学校PTA副会長)

Table 9 サポートチーム展開過程（続き1）

時　期	回	事　項	具体的な内容
12月下旬	5	対象生徒へのアセスメント実施 ⟹●事前調査 （プリテスト）	対象生徒に対して、サポートチームによる支援を説明し、本人の承諾を得た後「教育相談のための綜合調査Σ」（⟹プリテストの実施）同時に、対象生徒と関係のある無職少年と面接を行い、サポートチームの趣旨を説明する。
1月上旬	6	第2回サポートチーム会議の開催	サポートチーム会議において、対象生徒への具体的な援助目標や家庭支援の方針・課題を検討し、対象生徒への個別援助計画の策定をする。（参加者⟹地区自治会長・民生委員・主任児童委員・児童福祉司・社会福祉協議会地区担当・生徒指導主任）
	7	サポートチームによるサポート開始	民生委員よる家庭訪問及び保護者への面接相談による対象生徒への対応助言
	8	サポートチームによるサポート	民生委員よる家庭訪問及び保護者への面接相談による対象生徒への対応助言
1月中旬	9	サポートチームによるサポート	少年相談員よる対象生徒の面接相談及び指導
1月下旬	10	第3回サポートチーム会議の開催	サポートチームの経過報告及び現在の生活状況等の情報に基づく、次期援助目標を策定する。（参加者⟹地区自治会長・民生委員・主任児童委員・児童福祉司・社会福祉協議会地区担当・生徒指導主任）
	11	サポートチームによるサポート	民生委員及び学校による自然体験活動
	12	サポートチームによるサポート	社会福祉協議会・学校による職場体験学習
2月前半	13	サポートチームによるサポート継続	学校・関係機関・大学によるサポートの継続
2月下旬	14	第4回サポートチーム会議の開催	対象生徒の中学卒業後の進路に関して検討する。⟹保護司の仲介によって、工場への就職斡旋を対象生徒に助言する方針を確認する。。

Table 10 サポートチーム展開過程（続き2）

時　期	回	事　項	具体的な内容
3月上旬	15	対象生徒の進路選択・決定援助	学級担任と保護司による対象生徒への進路選択の援助を行う。対象生徒は、高校進学ではなく就職を希望している。保護者も本人の意志を尊重している。そこで、保護司の仲介によって、工場への就職活動を行う。
3月中旬	16	対象生徒の進路決定とサポートチームの終結準備	対象生徒が工場への就職を決意と保護者の同意を得る。工場への就職希望を告げ、就職が内定する。それに伴い、サポートチームの終結に向けての準備を行う。
	17	第5回サポートチーム会議を経てサポートチームの終結及びサポートチームの教育効果の測定 ⟹ ●事後調査（ポストテスト）	対象生徒の就職内定に伴いサポートチーム会議を開催し、サポートチームの終結を検討、合意・決定する。また、対象生徒に対して、本人の承諾を得た後「教育相談のための綜合調査Σ」（⟹ ポストテストの実施）を実施する。

3.2.2 アセスメントの結果（事前調査）

サポートチームの第1段階において、対象生徒のアセスメントを実施する。今回は、対象生徒が不登校状態であることも考慮して、12月下旬に自立支援コーディネーターが対象生徒と面会し教育相談のための総合調査[10]を行っている。これは、第2回のサポートチーム会議の際の生徒理解情報として提供されると同時に本研究の事前調査(プリテスト）を兼ねている。 その結果は、以下の通りである。なお、Σではテスト後に、生徒用の結果表に加えて、生徒の心理状態等の特徴を出力した教師用個人表と教育相談のポイントとなる学級一覧表が返送される。

(1) 「教師用個人表」からのアセスメント結果

1) 学習面のアセスメント ⟹CheckI：学習についての充実（STUDY SCALE）

Fig.27 の〔参考〕に見られるように、しっかり勉強をやっていきたいと思ってもいないし、実際にやれる自信もない。また、自分から進んで勉強をしようと思わないし、実際にも、ほとんどしていない。さらに、学校での授業は難しすぎると思っている。

2) 心理面のアセスメント ⟹CheckII：自己を見つめる（INTERNAL SCALE）

Fig.28 から、ゆきづまり感と自己否定感は中程度であるものの、行動を押さえられないと感じている。

3) 社会面のアセスメント ⟹CheckIII：人びとのなかで生きる（EXTERNAL SCALE）

Fig.29 から、疎外感が非常に強く、問題にくじけずうちかっていこうとする力も最低である。また、家庭・学校・学級生活での不適応感を強くもっている。特に、コメントにあるように教師に対しては「全く心が開けず、背を向けている。」

4) 学習面・進路面・心理面・社会面・健康面・家庭面での悩み ⟹ 悩み・からだと心の状況－相談のテーマとなる主訴－（**Table11** ～**Table12** を参照）

1. 進路面・将来では、「(9) 将来、どの方向に進めばよいかわからぬ不安」を抱いている。
2. 学校生活では、「(17) 登校前に体の調子が悪くなるときがある」という身体的不調や「(18) 学校に行きたくないと強く思うときがある」という不登校傾向を示している。
3. 家庭生活では、「(25) 家庭のことで心配ごとがある」・「(26) 親は、私の気持ちをわかろうとしていない」・「(30) 家庭の経済的な問題でなやむ」など家庭や保護者に対する心配事を抱いている。また、「(29) 夜おそくまで出歩くことがある」という深夜徘徊をしている。

[10] 大阪心理出版『教育相談のための綜合調査Σ』

4. こころとからだの健康では、「(39) 頭が痛くなることが多い」・「(40) じんましんやかぶれを起こしやすい」・「(41) 立ちくらみ・目まいがよく起きる」・「(43) 乗物によいやすい」など身体的不調を訴えている。

(2) 「相談のときに役立つ学級一覧表の見かた・活用のすすめ」からのアセスメント結果（**Table13** を参照）

1) （Ⅰ）相談のきっかけから、対象生徒は「先生の呼びかけが必要なタイプ」であり、周囲からの意図的・積極的な働きかけが必要である。

2) （Ⅱ）相談相手に望んでいる相手としては、友人を希望している。

3) （Ⅲ）相談の要点では、学習面と対人面（特に集団適応）に注意する必要がある。

4) （参考）では、自己の生活態度をふまじめだと思っていることがわかる。また、成績の自己評価は5段階中1と最低の評価をしている。

5) 保護者との相談のテーマとしては、「B. 不登校」・「C. ストレス」・「E. 対話不足が指摘されている。 各アドバイスは、次の通りである。

B. 不登校
登校前、頻繁に身体の調子が悪くなるのは「不登校」の前兆と言われています。家庭で気づかれたことは早々に担任の先生に伝え、協力して、表面化以前の対応をはかるのが大切です。

C. ストレス
「身体の健康」についての悩みや気がかりが多いのはストレスが溜まっているしるしです。イライラや緊張感の強いのは心配ですから「リラックス」の方法など考えてみましょう。

E. 対話不足
家族との対話も途絶えがちになるときは、子どもが何かの理由から「まわりに心を閉ざしている」からで、「わかってくれない」というのは、心が開けないで困っている子どもの焦りです。

以上のアセスメントの結果から、次のような個別計画が立てれてた。

(1) 学習面を短期間に向上させるのは困難を伴うので、心理的な安定や対人関係の改善をサポートの重点とする。特に対人関係では、外部の大人との関係改善に警察の力が必要である。

(2) 家庭支援に関しては、学校では無理なので児童相談所や民生委員等の福祉関係の協力が必要である。

(3) 中学3年であるため、進路に関する選択・決定にかかわるサポートを行う。

Check Ⅰ 学習についての充実感

❶ STUDY SCALE

10 9 8 7 6 5 4 ③ ② ❶

（充実感が低く、学習不足のおそれ）→

1年次 →

やや 強い とくに

2年次 →

3年次 → ★

学級の分布（人数）

10 9 8 7 6 5 4 ③ ② ❶

❷ 学習態度

学校 （うちこめない） ★

やや 強い とくに

家庭 （うちこめない） ★

やや 強い とくに

❸ 学習意欲 （なくしてきている） ★

やや 強い とくに

❹ 自信 （なくしてきている） ★

やや 強い とくに

〔参考〕

★しっかり勉強をやっていきたいと思ってもいなかったし、実際にやれる自信も全くない。

★自分から進んで勉強をしようと思わないし、実際にもほとんどしていない。

★学校での授業は、むずかしすぎると思う。

★家での勉強時間＝30分以下です。

★塾などでは習っていません。

Fig. 27 事前調査（アセスメント：STUDY SCALE）

Check Ⅱ 自己を見つめる

5 INTERNAL SCALE

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

（ゆきづまり感が強い）→

1年次 ➡

やや　強い　とくに

2年次 ➡

3年次 ➡ ★

学級の分布（人数）

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

（うちこめない）

6 自己否定 ★

やや　強い　とくに

7 行動のタイプ　行動をおさえる　○ ○ ○ ○ ★　行動が目立つ

参考〕

★この欄の＊印が付いた項目は、「自分のなかでは最も生き生きとできる」と生徒が自覚しているところで、相談の際の「励ましのポイント」となる大切な部分です。（※ 中学校の場合は「行動の記録」欄の項目に準拠。）

○○○○○○○○○○○○

註・健康の自覚）欄は健康・体力向上」欄の記載の際に援用ください。

公共心・公徳心

公正・公平

勤労・奉仕

生命尊重・自然愛護

思いやり・協力

創意工夫

責　任　感

自主・自律

（健康の自覚）

基本的な生活習慣

Fig. 28　事前調査（アセスメント：INTERNAL SCALE）

Check Ⅲ 人びとのなかで生きる

8 EXTERNAL SCALE

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

（疎外感が強く、後退のおそれ）→

1年次 →

やや 強い とくに

2年次 →

3年次 → ★

学級の分布（人数）

9 問題にくじけず、うちかっていこうとする力

1年次 →

やや 強い とくに

2年次 →

3年次 → ★

10 家庭

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

（うちこめない）

★

やや 強い とくに

11 学校生活

（なくしてきている）

★

やや 強い とくに

★先生に 全く心が開けず、背を向けている。

12 学級

（なくしてきている）

★

やや 強い とくに

★級友は 学級内に2～3人、学級外に6人以上いる。

Fig. 29 事前調査（アセスメント：EXTERNAL SCALE）

Table 11 悩み・からだと心の状況－相談のテーマとなる主訴－

カテゴリー	NO	主訴の内容	有無
学　　習	(1)	成績がよくないのでなやむ	★
	(2)	わからない科目がある	
	(3)	勉強のしかたがほとんどわからない	
	(4)	思うような成績がとれなくてなやむ	
	(5)	テストや受験勉強のことであせる	
	(6)	勉強する意欲がわかない	
	(7)	いろんな理由で勉強に集中できない	
進　路・将　来	(8)	進学か就職するかでなやんでいる	
	(9)	将来、どの方向に進めばよいかわからぬ不安	★
	(10)	進学したいが成績がよくない	
	(11)	志望校や望む就職先にいけるだろうかの不安	
	(12)	進路のことで親と意見が衝突する	
学　校　生　活	(13)	クラスの人が変な目で見たりいじめたりする	
	(14)	クラスの人から無視されているように思う	
	(15)	今のクラスは、自分に合わない	
	(16)	クラブ活動のことでなやんでいる	
	(17)	登校前に体の調子が悪くなるときがある	★
	(18)	学校に行きたくないと強く思うときがある	★
	(19)	今の学校は自分に合わない	
友　　人	(20)	友人との仲がうまくいかない	
	(21)	真の友人がいない	
	(22)	身近に悪友がいるので困っている	
家　庭　生　活	(23)	父・母とうまくいかない	
	(24)	家族の仲がよくない	
	(25)	家族のことで心配ごとがある	★
	(26)	親は、私の気持ちをわかろうとしない	★
	(27)	親の期待が大きすぎて重荷になっている	
	(28)	親に暴力をふるうことがある	
	(29)	夜おそくまで出歩くことがある	★
	(30)	家庭の経済的な問題でなやむ	★

Table 12 悩み・からだと心の状況－相談のテーマとなる主訴－（続き）

カテゴリー	NO	主訴の内容	有無
こころとからだの健康	(31)	いつもまわりから見られているような気がする	
	(32)	短気でおこりやすい	
	(33)	自分の性格のことで強くなやむ	
	(34)	今の生活は自分の理想とまるで違っている	
	(35)	将来の希望がもてない	
	(36)	死んでしまいたいと本当に思うときがある	
	(37)	胃や腸が弱いので困っている	
	(38)	かぜをひきやすいので困っている	
	(39)	頭が痛くなることが多い	★
	(40)	じんましんやかぶれを起こしやすい	★
	(41)	立ちくらみ・目まいがよく起きる	★
	(42)	息ぎれやどうきがする	
	(43)	乗物によいやすい	★
	(44)	夜、よく眠れぬことが多い	
	(45)	体力・運動能力のことでなやむ	
その他	(46)	自分の顔かたち・スタイルで強くなやむ	
	(47)	異性や性の問題で強くなやむ	
	(48)	人生の問題でなやむ	

Table 13 学級一覧表（Ⅰ）：相談のとき役立つ学級一覧表の見かた・活用のすすめ

カテゴリー	見かた・活用の観点	有無
（Ⅰ）相談のきっかけ	＊自発的に相談できるタイプ	
	＊先生の呼びかけが必要なタイプ	★
	よく相談している	
	思いきって相談できない	
	相談したいと思っている	
（Ⅱ）相談相手に望んでいる人	父	
	母	
	その他の家族	
	先　　生	
	友　　人	★
	その他の人	
	相談相手がいない	
（Ⅲ）相談の要点	①学習の充実感が低い	★
	学習意欲をなくしてきている	★
	自信をなくしている	★
	⑤ゆきづまり感が強い	
	自己否定感が強い	
	⑧対人の疎外感が強い	★
	家庭不適応感が強い	★
	学校不適応感が強い	★
	学級不適応感が強い	★
	⑨問題解決意志が弱い	★
（参考）調査の検証	応答に矛盾がある	
	△生活態度の判断	1
	△成績の自己評価	1
保護者との懇談のテーマ	A　期待過剰	
	B　不登校	B
	C　ストレス	C
	D　意欲喪失	
	E　対話不足	E
	F　その他	

①**この結果は**　このまま読んでください。

②⟹ **生徒は自分の「生活態度」を**　ふまじめだと思う。
　⟹ **生徒は自分の「成績を」**　5段階の「1」と思う。

3.2.3　サポートチームの教育効果（事後調査）

約4か月にわたるサポートチームの結果、対象生徒が保護司の紹介で工場への就職が内定した。そこで、サポートチームを終結すると同時に対象生徒にアセスメント時に実施した教育相談のための総合調査を事後調査として行った。対象生徒のサポートチーム実施前と実施後の教師用個人表の比較から、以下のようなことが明らかとなった。なお、次ページからの図中の★は事前調査の得点を示し、●は事後調査の得点を示している。

(1) Check Ⅰ：学習についての充実（**Fig.30**）

学習面については、アセスメント段階での予想はされていたが、家庭での学習態度・学習意欲・学習態度はかなりプラス方向（肯定的）の変化した。

1) STUDY SCALEは、$\boxed{1} \Longrightarrow \boxed{2}$にわずかながらプラス方向に変化した。
2) 学習態度のうち、学校での学習態度は$\boxed{1} \Longrightarrow \boxed{2}$とわずかながらプラス方向に変化した。また、家庭での学習態度は、$\boxed{1} \Longrightarrow \boxed{3}$とかなりプラス方向に変化した。
3) 学習意欲は、$\boxed{1} \Longrightarrow \boxed{3}$とかなりプラス方向に変化した。
4) 自信は、$\boxed{1} \Longrightarrow \boxed{3}$とかなりプラス方向に変化した。

(2) Check Ⅱ：自己を見つめる（**Fig.31**）

心理面ではプラス方向への変化が顕著に見られた。対象生徒の心理的な安定の向上や自己否定感の減少が見られる。

1) INTERNAL SCALEは、$\boxed{5} \Longrightarrow \boxed{9}$とプラス方向に大きく変化した。
2) 自己否定は、$\boxed{6} \Longrightarrow \boxed{9}$とプラス方向に大きく変化した。
3) 行動のタイプは、行動が目立つと変化しなかった。
4) 〔参考〕の「勤労・奉仕」にマークがつき、働くことや他者への奉仕において「自分のなかでは最も生き生きとできる」と自覚している。サポートチームでの実践が、大きな影響を与えたことがわかる。

(3) Check Ⅲ：人びとのなかで生きる（**Fig.32**）

社会面においても心理面同様に、プラス方向への変化が顕著に見られた。特に、家庭・学校への適応感が大きく変化している。

1) EXTERNAL SCALEは、$\boxed{1} \Longrightarrow \boxed{4}$とプラス方向に かなり変化した。疎外感や後退のおそれは当初と比較すると、かなり減少したと考えられる。
2) 問題にくじけず、うちかっていこうとする力は、$\boxed{1} \Longrightarrow \boxed{2}$とわずかにプラス方向に変化した。

3) 家庭適応については、$\boxed{2} \Longrightarrow \boxed{5}$と大きくプラス方向に変化している。

4) 学校適応については、$\boxed{1} \Longrightarrow \boxed{6}$へプラス方向に顕著に変化している。また、教師に対しては当初全く心を開かず背を向けている状態であったが、「比較的好ましい感じをもち、素直になれるときが多い」と人間関係の変化がみられる。

5) 学級適応については、$\boxed{3} \Longrightarrow \boxed{5}$とかなりプラス方向に変化している。

以上の結果から、サポートチームの対象生徒への自立支援効果を整理すると、以下の点が指摘される。

(1) サポートチームの成果

1) アセスメントに基づいて、生徒の学習面・進路面・社会面・進路面・健康面の実態把握や家庭・学校・地域の現状を行うため、問題点や問題解決のためのリソースや方法について具体的な見通しが立てられる。

2) 「誰が、いつ、どのような目的で、何をするのか」については、自立支援コーディネーターを中心としたサポートチーム会議で協議し、共通理解を図っている。そのため、各スタッフが目的意識をもって生徒の問題解決に臨めたと考える。

3) 今回のサポートチームは短期的介入であったものの、生徒への心理面や社会面に大きな変化をもたらした。この点で、サポートチームの応用可能性は十分にあると考える。

4) 進路達成においては、学校教師だけでなく関係機関や地域住民の協力なくしては実現しなかったと考える。この意味においても、サポートチームの社会的自立支援への可能性は高いのではないかと考える。

(2) サポートチームの課題

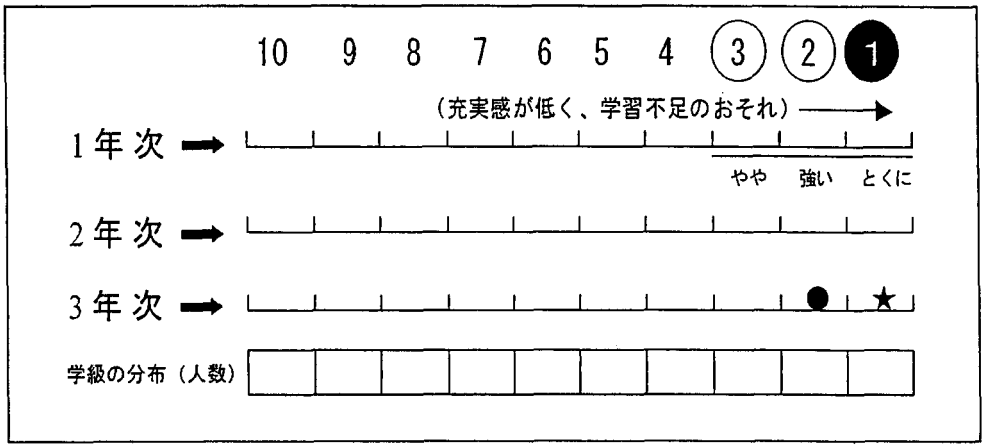
1) 家庭環境が複雑である場合や保護者がサポートチームに対して否定的な場合は、保護者の同意を得ることができるかどうかはわからない。したがって、保護者をサポートチームのスタッフとして参加させるには、その方法論の検討が必要となる。

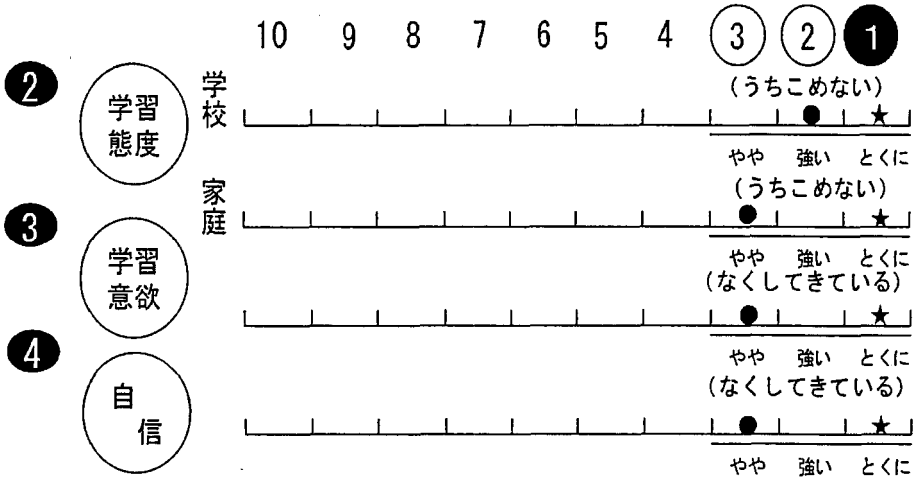
2) 関係機関の参加者が多い方が高い効果を期待できそうであるが、機動的に動けるかどうかは一律に判断できない。今回は、自立支援コーディネーターによるサポートチーム会議の進行・対象生徒のモニタリング・関係機関間のつなぎ（リエゾン）が機動的であったため成功したように考える。

3) 学校教師が自立支援コーディネーターとなるには、教育領域・福祉領域の両面からの研修が必要となるであろう。自立支援コーディネーターの育成方法は、今後の課題である。

Check Ⅰ 学習についての充実感

❶ STUDY SCALE





参考〕

★しっかり勉強をやっていきたいと思ってもいなかったし、実際にやれる自信も全くない。

★自分から進んで勉強をしようと思わないし、実際にもほとんどしていない。

★学校での授業は、むずかしすぎると思う。

★家での勉強時間＝30分以下です。

★塾などでは習っていません。

Fig. 30 事後調査（STUDY SCALE）

Check Ⅱ 自己を見つめる

5 INTERNAL SCALE

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

（ゆきづまり感が強い）→

1年次 ➡

やや　強い　とくに

2年次 ➡

3年次 ➡ ●　★

学級の分布（人数）

6 自己否定

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

（うちこめない）

●　★

やや　強い　とくに

7 行動のタイプ

行動をおさえる ○ ○ ○ ○ ★ 行動が目立つ

〔参考〕

★この欄の＊印が付いた項目は、「自分のなかでは最も生き生きとできる」と生徒が自覚しているところで、相談の際の「励ましのポイント」となる大切な部分です。（※ 中学校の場合は「行動の記録」欄の項目に準拠。）

○○○○○○○★○○○○○

註・健康の自覚）欄は「健康・体力向上」欄の記載の際に援用ください。

公共心・公徳心

公正・公平

勤労・奉仕

生命尊重・自然愛護

思いやり・協力

創意工夫

責任感

自主・自律

（健康の自覚）

基本的な生活習慣

Fig. 31 事後調査（INTERNAL SCALE）

Check Ⅲ 人びとのなかで生きる

8 EXTERNAL SCALE

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

（疎外感が強く、後退のおそれ）→

1年次 →

やや 強い とくに

2年次 →

3年次 →

学級の分布（人数）

9 問題にくじけず、うちかっていこうとする力

1年次 →

やや 強い とくに

2年次 →

3年次 →

10 家庭

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

（うちこめない）

やや 強い とくに

11 学校生活

（なくしてきている）

やや 強い とくに

★先生に 比較的好ましい感じをもち、素直になれるときが多い。

12 学級

（なくしてきている）

やや 強い とくに

★級友は 学級内に4～5人、学級外に6人以上いる。

Fig. 32 事後調査（EXTERNAL SCALE）

4　総合考察ならびに今後の課題

研究Ⅰ及び研究Ⅱの結果から、当初の目的は達成できたと考える。大学と児童自立支援施設との連携・協働によるキャリアガイダンスやサポートチームの実践は、今後の児童自立支援施設の教育福祉面の充実という課題に貢献できると思われる。全体を通した生徒及び教職員の感想は、Table14～Table16 の通りである。本研究を端緒に、今後さらに生徒の実態や発達段階に応じた個別教育プログラムや授業開発を行っていく必要がある。

Table 14 生徒の感想

生徒	感　　想
S_A	すごく楽しかったです。
S_B	楽しいと思います。ぼくたちも助かる。
S_C	いつもと変わらない
S_D	楽しくてわくわくするときもある。
S_E	いつも知っている人の顔を見るのではなく、他の人とも勉強したいです。
S_F	新鮮な感じがするので楽しいです。いろいろなこともわかる。
S_G	別の学校の先生が来てくれる授業をもっと増やしてほしいです。校外学習もしたいです。
S_H	ちょっと恥ずかしかったけど、たまには違った授業が入って楽しかったです。
S_I	いつも同じ先生なのでたまには違う先生でもいいなと思って聞いていました。楽しかったです。
S_J	楽しかったです。外出して、外での行事をしたい。
S_K	楽しかったです。外でスポーツがしたかったです。
S_L	楽しかったです。わくわくする緊張感がありました。
S_M	特になし。
S_N	楽しい人もいたら楽しくない人もいる。
S_O	ひじょうに楽しかった。
S_P	楽しかった。
S_Q	外に出て、老人ホームに介護をしに行ったり。とにかく、知らない人とか、人と人の関わりをテーマにして勉強していきたいと思っています。

Table 15 教職員の感想と要望

質問事項	意見	内　　想
A. 大学との連携について	X_1	基本的には大学と現場の交流・連携が必要。ただし、現在の教員養成課程では、児童自立支援施設など児童養護施設については教えないし、教えられる大学教師もいない。そのため、大学でのカリキュラムの再検討が必要であろう。
	X_2	地元大学の教育学部との連携・交流は大切。今回は、遠方より無償でお越しいただいて大変感謝している。物理的な観点や経済的な観点から、地元の教育学部と連携して児童の原籍校への復帰を含めた社会的自立を促進することが大切であると考える。
	X_3	今回のように大学から児童自立支援施設に出向いてくる場合と、児童自立支援施設で働く現場職員が大学に出向き講演・演習をする場合の双方向の交流が必要であると思う。
	X_4	芸術に関する教科の授業が不足していると感じている。豊かな表現力や情操を育むためにも、国語力や数学力と同等の芸術力が必要だと思う。子どもたちの芸術に関する力を、いろいろな先生方の力をお借りして培っていきたいと思う。
	X_5	授業内容の設定や目的・授業展開方法などの課題や児童生徒一人ひとりの課題設定に至る分析法等について検討する場を設定し、専門的アドバイスや指導などをいただきたい。
	X_6	教育課程の編成や実施・単位時間の具体的実施法等の実践に関わる悩みなど多くの課題が山積みである。今後公教育を導入する施設と分校・分教室の教育推進を図るため、データ・資料の収集や分析・開示などの取り組みの一助をお願いしたい。
	X_7	大変よい。ありがたい。今後は協議の場などお互いにやりとりしながらそれぞれの実態に応じたプログラム開発を行うことができればと考える。

Table 16 教職員の感想と要望 (続き)

質問事項	意見	内　　想
B. 必要な教育的支援	X_8	基礎学力・基本的生活習慣・心の成長（親子関係の希薄化による）がないまま児童・生徒が親になる現実があり、教科教育とともに心の教育や将来の虐待予防を視野に置いた教育内容が必要。
	X_9	基礎・基本の学力の定着を目指しているが、短期教育で学年例の学力習得は不可能であり、前籍校に帰ってから授業への参加や習熟度の格差から意欲が損なわれる可能性がある。
	X_{10}	前籍校の地域や家庭・学校の状況が好転しているとは限らず、分校在籍時から地域や家庭・学校への支援や援助の具体的方策などの検討会や打合会などを実施し、環境美化に努める必要がある。
	X_{11}	転学（退園）後のアフターケアにも取り組まなければならない。
	X_{12}	生き方教育を含めた心の教育に関する系統的な取り組みが必要である。
C. 今後の教育的課題	X_{13}	児童自立支援施設における学習指導要領の弾力的運用を文部科学省が認めることが必要である。
	X_{14}	公教育の実施を視野に入れれば、教員養成大学に「児童自立支援教員養成コース」の新設が必要であろう。”
	X_{15}	矯正教育と評価による教育の融合をどのように推進すべきかという点。規則で矯正する教育から、達成状況を明確にし、児童生徒の達成度合いから新たな目標を指導者等の援助の下、自ら設定し、目的意識を持って生活や学習に取り組ませ、本人や指導者等が総合的に評価し、自立に向けた意欲や進路に向けた意欲を高める手立てを作成すべきである。